

University
Current
Review

ISSN 0288-1748 2020(令和2)年11月20日発行【隔月刊】

[特集]
大学ボランティアセンターの役割とこれから

大学時報

NO.395
2020. **11**



だいがくのたから
Thesaurus Universitatis

東邦大学



落成式(1929年)



現在の医学部本館



大学院講堂内部



創立者 額田豊(左)、額田晋(右)

医学部本館（大森キャンパス）

東邦大学・大森キャンパスにある医学部本館は、戦前に鉄筋コンクリート構造の学校・病院建築を得意とした増田清の設計によるもので、1929年に南側（正面）地上3階建て部分、1933年に北側（後方）地下1階地上4階建て部分が竣工した。外壁には一面にスクラッチタイルが使用され、中庭の壁面上部には幾何学的な意匠が施されている。また、3階の大学院講堂内部には、増田の建築の特徴であるアーチ構造が採用されている。1935年に開催された「大東京建築祭」の記念出版物『建築の東京』（都市美協会編、1935年）には、耐震性・耐火性の高い建築の一つとして掲載された。

東邦大学の前身となる帝国女子医学専門学校は、1925年に医師の額田豊・晋兄弟によって東京・大森の地に創立した。当初は2階建ての木造校舎が建てられていたが、開校2年後の薬学科併

設などを経て学校の規模が拡大すると、鉄筋コンクリート造の校舎建設が決定した。戦前は医学科だけでなく薬学科も使用していたため、この建物は「本館」と呼ばれた。

1945年4月15日、工場の密集する東京の城南地区が空襲の標的となった際には、本館は焼失の危機に晒された。この空襲によって校舎・付属病院など大部分の施設が焼失したが、当時、本館に取り残されていた薬学科と理学専門学校の学生・教職員ら数名が消火活動を行い、本館への類焼が阻止されたという記録が残されている。終戦直後の学校再開時には、本館で各学科の講義が午前・午後の2部制に分けて実施されるなど、学校の戦後復興を担う重要な拠点となった。

現在は、「医学部本館」の名称で法人本部と医学部が使用しており、東邦大学の歴史を象徴する建物として受け継がれている。

82	74	68	66	64	60	56	52	46	40	34	32	16	10

だいがくのたから 東邦大学

大学点描 豊田工業大学

巻頭言 新キャンパスの完成を機に 保立和夫

視点 創立100周年、その先へーポストコロナを見据えてー 内藤二郎

座談会 小特集連動企画 コロナ禍における学生の心のケア

杉原保史／西浦太郎／田上正範／早川和宏／(司会)音好宏

特集 大学ボランティアセンターの役割とこれから

「学生のボラセン」を目指して

ー明治学院大学ボランティアセンターの20年ー 猪瀬浩平

「ピア」精神に基づいたボランティア 矢野泉

人権意識と自治意識を持つ市民を育てる

ー大学ボランティアセンターの基本的視点とはー 筒井のり子

サービスマーケティングとボランティア活動

ー桜美林大学サービスマーケティングセンターの機能と課題ー 牧田東一

震災から10年とこれからの展望 菱河亮平

手さぐりの中から一歩でも前へ

ー「わざわざい」の下でのボランティア支援ー 光田剛

ずいそう 大学の存在価値を再吟味しよう 安田隆二

小特集 座談会連動企画 コロナ禍における学生の心のケア

学生相談の新しい様式へー新型コロナウイルス感染症の影響下における

日本学生相談学会の取り組みー 日本学生相談学会

いま大学学生相談室にできること 安藤寿康

コロナ禍における学生相談の模索ー学内連携のもとでー 井口知子

志と情熱
先人から受け継がれた

豊田工業大学は、発明王 豊田佐吉翁の遺訓「研究と創造に心を致し、常に時流に先んずべし」を建学の理念とし、2021年に開学40周年を迎えます。

トヨタ自動車の創業者である、佐吉翁の長男・豊田喜一郎は「人材育成を通じ、社会に貢献したい」との夢を抱き、その思いが受け継がれ、1981年にトヨタ自動車による社会貢献活動の一環として開学しました。

モノづくりの発展に貢献してきた先人の強い志と情熱を受け継ぎ、未知の分野に果敢にチャレンジし、新しい道を切り拓いていく国際的視野を持った開発型技術者・研究者の育成を目指しています。



恵まれた教育・研究環境

教員 1 名あたり学生約 10 名という恵まれた教育・研究環境にあり、開学以来、学部 1 年次全寮制を実施している本学では、多くの仲間との共同生活を通じ、自主性や自立心、協調性やリーダーシップなどの社会人基礎力を育成しています。

少人数環境であることや、多くの研究室が充実した研究設備・装置を保有していることなどから、研究室配属後は、学生は時間の制約を受けることなく、これらの設備・装置を利用して研究に打ち込み、効率よく高度な知識・技術を身につけることができます。

6 年間に及びリニューアル工事が完了し、今年新キャンパスが誕生しました。学内外のコミュニケーションや連携が一層深まるよう設計され、自由闊達、談論風発、活気にあふれたキャンパスとなるよう期待されています。




工学部 先端工学基礎学科は単一学部・単一学科であることから、全員が同学科に在籍し、1年次には外国語・教養科目と工学基礎科目を中心に学びます。2年次では、機械システム・電子情報・物質工学の基幹となるそれぞれの専門基礎科目を学びます。3年次になると3分野から主専攻を選択するとともに、副専攻として他分野の科目も履修することで、幅広い専門知識の修得を可能としています。4年次には研究室に所属して研究に取り組み、卒業後は半数以上の学生が大学院に進学します。

工学を多角的に理解することで、単一分野の知識だけでは解決できない課題にも果敢に挑める、広い学識を持った創造性豊かな人材を育成しています。

豊田工業大学での学び、
幅広い基礎と複数分野を学ぶ





近年、社会の仕組みが急速に高度化・複雑化し、工学が社会に果たすべき役割は多大となっています。産業界との結びつきが強い本学では、産学連携を通じ、社会の発展に寄与しています。

教育面においては、企業の製造・研究開発部門に赴く学外実習を1・3年次の必修科目として実施。企業より与えられた個別の課題に取り組む本格的な実習を行います。また、企業派遣講師による「トヨタ生産方式」を学ぶ講義や実習など豊富な体験教育を行い、実践力を養っています。

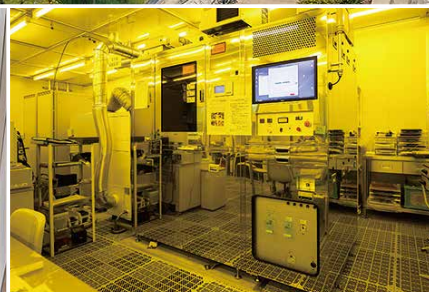
研究面においては、複数の共同・受託研究や、大学附属の「スマートビークル研究センター」「スマートエネルギー技術研究センター」「スマート光・物質研究センター」などを柱に、社会と一体となりイノベーションの創出を目指しています。

理学は真理と語らい、
工学は社会と語らう



2020年、 キャンパスが生まれ変わりました

開学30周年を機にキャンパス刷新の計画を進め、
2014年から6年間のリニューアル工事を経て、今年
ついに新キャンパスが完成しました。



学校法人トヨタ学園

豊田工業大学

TOYOTA TECHNOLOGICAL INSTITUTE

◆工学部 先端工学基礎学科

〒468-8511

愛知県名古屋市天白区久方二丁目12-1

<https://www.toyota-ti.ac.jp/>



University Current Review

大学時報

2020.11 / NO.395



新キャンパスの完成を機に

保立和夫 豊田工業大学学長

本学は、トヨタ自動車の社会貢献活動の一環として1981年に開学した。建学の理念は、豊田佐吉翁の遺訓「研究と創造に心を致し、常に時流に先んずべし」である。一学年90名という小規模大学であるが、教員1人当たりの学生数10名など、密度の高い教育・研究が可能な設計図のもとに活動している。

本年夏にキャンパスリニューアルが完了した。充実した環境で学生・教職員一丸となり、工学を基盤に社会に貢献する人材の育成に邁進し、「山椒は小粒でもピリ辛い」存在感を高めてゆきたい。

創立100周年、その先へ

—ポストコロナを見据えて—

内藤 二郎 大東文化大学学長

1. 大東文化大学、100年の歩み

大東文化大学は、東京都板橋区高島平と埼玉県東松山市岩殿の2カ所にメインキャンパスを構え、8学部20学科と大学院7研究科を擁する総合大学である。2020（令和2）年5月時点での在籍者数は1万1308名で、在籍者規模でいえば、全国私大の30位ほどに位置している。またこれまで約13万人の卒業生を社会に送り出してきた。

本学のルーツは、1923（大正12）年、ときの帝国議会における「漢学振興ニ関スル建議案」によって設置された大東文化学院に遡り、3年後の2023（令和5）年に創立100周年を迎える。

第2次世界大戦後の新制大学令により、東京文政大

学として再出発し、1953（昭和28）年には校名を元々の大東文化学院に由来する大東文化大学と改称した。1961（昭和36）年に現在の板橋区高島平キャンパスに移転し、翌年には、文政学部が文学部と経済学部に分離独立した。また1967（昭和42）年には東松山に広大な敷地を獲得、教養部を移設したほか、各種体育施設の充実を図った。以後、高度成長期から現在に至るまで、社会のニーズに応えた学部・学科増設を行ってきた。最も新しい学部・学科は、2018（平成30）年に創設された社会学部、スポーツ・健康科学部看護学科、そして文学部歴史文化学科である。

また本学は、課外活動が盛んなことでも全国的に名前を知られている。特に箱根駅伝をはじめとした陸上長距

離の分野では、多くの歴史を作ってきた。またラグビー部も3度の大学日本一を達成し、名プレーヤーたちを輩出してきた。近年では、テコンドーや女子の陸上長距離、バスケットボールなども全国的に活躍している。

さらに、全国的に大東文化大学の名前を知らしめているのが、書道である。そもそも漢学振興という目的で創設された本学では、開学当初より書の研究、教育が重視されてきた。戦前は授業のノートを取るのも答案の作成も、鉛筆やペンではなく、筆で行っていた。戦後は、日本を代表する書家の青山杉雨を中心に1969（昭和44）年に書道文化センターが開設され、その後、書道研究所、そして文学部書道学科創設と発展してきた。「平成」や「令和」の元号揮毫^{きごう}も本学で書を学んだ卒業生の筆になるものであることは、よく知られている。書道学科の充実もさることながら、課外活動での書道部の活躍も全国的である。

教学組織の中心である学部学科の充実はもちろんのこと、教育・研究活動をサポートするセンター組織も整っている。全学的な情報設備を管理・運営し、情報教育の充実を担う学園総合情報センター、教員志望の学生に対して



板橋キャンパス3号館の書道研究所ギャラリー

免許取得をサポートする教職課程センター、留学生の受け入れ・送り出しを担う国際交流センター、体育実技科目や40以上に上る運動部のサポートを行うスポーツ振興センター、そして入試広報業務を担う入学センターがそれである。加えて大東文化歴史資料館、ビートルクス・ポスター資料館という2つの資料館、創設時以来の歴史と伝統を誇る東洋研究所を有している。

2. 新型コロナウイルスへの本学の対応

本学は、2020（令和2）年4月から新しい執行部体制をスタートさせ、3年後の創立100周年に向けて本格的な準備を開始する予定であった。しかし、その最中、新型コロナウイルスによるパンデミックが世界を襲った。3月には急遽対策本部が設置され、新旧執行部の連携の下でその対応に追われた。卒業式も入学式も中止とし、学生や教職員の入構禁止措置を決定せざるを得なかった。しかし、教育と研究活動は、大学の根幹である。これを止めるわけにはいかない。学生の入構を禁止して授業を行うには、インターネットを通じたオンライン授業を実施するほかなかった。しかし、受講する側の学生にその準備は

あるのか、教員側はオンライン授業実施に対応することができるのか、さまざまな困難が予想された。

本学は、4月の開講時期を5月の大型連休明けにずらし（主として1・2年生が通う東松山キャンパスはさらにそこから2週間遅らせ）、準備を行った。前期日程の終わりを睨んでのギリギリの開講延期措置であった。準備期間に考え、実行したことは大きく2つあった。1つは、これまでほとんど全くオンライン授業をやったことのない教員に対してのサポートとフォローである。幸いにして本学は、数年前からASAHINETTが提供するLMS (Learning Management System)であるmanabaを導入し、ラーニングの環境を整えつつあったが、その本格的運用を前倒しで実施することによって、円滑なオンデマンド配信型のオンライン授業の基礎を提供することができた。またZoomを用いての同時双方向方式のオンライン授業実施を希望する専任・非常勤教員には、急遽、そのアカデミック・アカウントを確保して配布した。

もう1つは、学生へのサポートである。本学では、学生に「大東学生特別支援給付金」5万円を給付することを決め、実行した。この支援金は学生の受講環境を整えるのに

大いに役立つ。しかし、それでも不十分な学生に対しては、300台以上のパソコンやモバイルルーターを貸与するなどの措置を迅速に行った。

必ずしも十分とは言えないまでも、この2つの措置を取ったことよって、学生の受講環境は一応整備され、何とか8月半ばまでの前期授業を大過なく乗り切ることができた。その後、学生への前期オンライン授業に対するアンケートや、全教員を対象とするオンライン授業の全学FD(Faculty Development)研究会を実施、300名近くの参加があり、好評を博した。

後期は少人数規模のゼミなどの授業を中心に、できるところから対面式授業を再開させ、基本的にはオンライン授業を継続していく予定である(9月時点)。

3. 新しい大学教育の可能性

新型コロナウイルス感染症拡大は、社会に大きなインパクトを与えた。たとえ現在の状況が多少は改善したとしても、今後、「新しい生活様式」での対応は、必須となってくるであろう。大学もまた例外ではない。

本学では既に来年度以降の教育の新しい可能性を、オ

ンライン授業を充実させるという方向で探り始めている。本年度前期は、急場しのぎの対応という側面が否めなかったが、その中でも問題点と可能性が浮き彫りにされてきた。それらを踏まえ、かつ後期の授業も進めつつ、より良い高等教育の提供を行っていく道筋を見つけ出すのが、大学が課せられた社会的使命であろう。

第一の気付きは、オンラインで大学が実現すべき全てのものを提供することは不可能だということである。当然と言えば当然のことだが、大学での「学び」は、授業を通じてのみ行われるものではない。図書館でナマの資料に触れたり、ゼミが終わった後に友人同士で語らったり、課外活動を通じて学んだりすることも多い。新型コロナウイルス感染症拡大前には当たり前すぎて気が付かなかったことが、今回の事態であらためて認識されたことは、教職員にとっても学生にとっても大きな意味を持った。

第二の気付きは、慣れないオンラインでの授業も工夫すれば、かなりの教育効果を上げることが可能であるということである。特に授業の規模やその内容によっては、オンライン授業の方がむしろ効果的である場合も少なからずあったことは発見であった。先にも述べた前期末に実施し

た全学FD研究会では、そうした事例がいくつか紹介された。研究会自体は、Zoomで開催されたのだが、その中でも課題と方法を共有することができた。通常のFD研究会では考えられないほど数多くの参加があったことも、オンラインのプラス効果だろうと思われる。

こうした気付きに基づき、来年度以降は、新しい大東文化大学の教育メソッドを構築し、推進していく予定である。新しいメソッドの第一は、対面式を中心としつつも、Zoomやmanabaを効果的に用いたハイブリッド型授業である。例えば、受講生は、自宅など場所を問わずに配布された教材等を用いて学習し、必要に応じて教室での対面式授業に臨む。そこではあらかじめ自学自習した内容に基づき、議論や質疑応答、グループワークなどの、まさに対面でなくては難しい「学び」を実践していく。

第二のメソッドは、時間や空間にとらわれないオンデマンド型の授業方法である。学生へのアンケート調査から分かったことの一つに、オンライン授業のメリットは、教員の説明などが繰り返し視聴できるということであった。従来の大教室での一方通行の授業では、ノートテイキングなどに必死になり、かえって授業の内容が頭に入ってこなかった



東松山キャンパスのアクティブラーニング教室

り、大人数であるがゆえに一部の私語をする受講生のせいで集中できなかつたりということが起こっていた。しかし、オンデマンド型授業ではそうした弊害が全くなくなる。成績評価の問題などの課題はあるものの、こうしたオンデマンド型授業を充実させていくことは、重要であろう。

いずれにせよ、大学はこの新しいメソッドを推進していくために、より一層の通信インフラ、パソコン環境の充実を図っていく必要がある。また教員のオンライン教材作成をサポートする人的な支援体制整備も喫緊の課題である。

4. 100周年+10ブランドプロジェクト

さて前述した通り、本学は3年後に創立100周年を迎える。今年は、新型コロナウイルス感染症対応で若干遅れが生じてはいるが、現在のところの進捗状況と本学のこれからの目標について述べておきたい。

創立100周年事業の準備が本格的に始まったのは、2018(平成30)年、当時の学長室が主体となって行っていた新・中期経営計画策定と連動してのことである。創立100周年事業の核となるプロジェクトは、「100周年+10ブランドプロジェクト」と名付けられ、本学のこれまでの

歩みを総括し、その先に向けて新しい価値を生み出し、偏差値だけでない独自の魅力によって本学への期待醸成の機会として生かすことが目標として掲げられた。

その後の検討過程の中で、具体的に目指すビジョンとして「視野を広げ、価値観を磨く『地域・領域・時代を超えた多彩な出会い』を生み出す文化の研究・交流拠点へ」が定められ、このビジョンを実現していくための活動を本年度以降実施していくことになった。重要なポイントは、この「多彩な出会い」の場をいかに形成していくかである。

周年事業は、ともすれば一過性のお祭りに終わってしまう危険性がある。そうならないためにも持続可能な場の形成が重要なのである。現在、この場をいかに形成していくかについて、「100周年+10ブランドプロジェクト」において集中的に討議を重ねているところであり、この原稿が活字になる頃には本学Webサイトにおいて、新たな「多彩な出会い」の場としてのプラットフォームが示されていることかと思う。恐らく今までの大学の周年事業とはひと味もふた味も違う、研究・交流の拠点が提示されることになるであろう。本学に関心を持つ皆さまには、是非、ご覧になっていただきたい。